

美歴だより

諫早市美術・歴史館だより

館長のつぶやき	2
関係者以外立入禁止	3
民具の部屋	4
いさはやの歴史	5
美術の時間	6
美歴 hand made club	7
お知らせ	8

CONTENTS

Isahaya
Museum of
Art & History
Museum News
Vol.9



虹（展望テラスより撮影）

館長のつぶやき

ここ掘れワンワンの犬になれるかな



▼人と犬との係わりは古く深いようだ。旧ソ連の人工衛星の最初の搭乗は確か犬だった。ヨーロッパでは猟犬として活躍、日本では南極調査で太郎、次郎等が頑張った。東京渋谷

駅前の「忠犬ハチ公」の逸話も有名だ。一方で犬の遠吠えだとか野良犬呼ばわりもすることもあるし、犬神として俗信も伝わり多種多様だ。

▼「花咲か爺さん」に出てくる犬は野良犬か迷い犬だったらしいが、親切な老夫婦に「ここ掘れワンワン」と言って宝の在処を教え、死しても幸をもたらしたという。犬に限らず、古今東西の寓話では、動物の活躍によって一見何でもないような処にも「宝」があることを教えてくれる。▼さて、小生はこの一年「諫早の七不思議」と題して諫早のあちこちを掘り起こしてみた。でも、「止めた方がいいよ、そこ掘るのは」と言われたり「そこを掘ってどうするの、誰が喜ぶの?」と批判されたり散々だ。実際にワンワンと言って掘ってみたが、宝が出たか蛇が出たかは不詳ながら、少なくとも「気づき」を掘り起こしたのではと勝手に自負している。もしかしたら、それが「ある卵」かも知れな

い。▼世間はそれを人材とか資源と呼ぶらしいが、それらはそんな大袈裟なものではない。換言すれば好奇心を持っている人は人材だし、好奇の目で見えた対象が資源だと思う。▼諫早には、好奇心旺盛の市民が多いことに気が付いた。表現・たとえば決してよくないが 目も利くし鼻もかぎ分ける。「ここ掘れワンワン」型だ。ただ、もう一步踏み込んで、触れてみよう、取り組んでみよう、調べてみようといった元気人が多くない気がする。どうしよう。そうだ、野次馬を増やそう。野次馬だって、立派な資源の源に違いない、彼らがいるから賑わいも発生するんだと思う。雑草だって資源だ。雑草は我々に逞しく生き延びる術を教えてくれるし、よく見ると美しい。野菊のように花屋さんで扱われる雑草もあるし、鳥によって運ばれ諫早で育ったヒゼンマユミは、その希少さゆえに幸いにも市の木に選ばれた。▼小野用水の流れを見ていると、水車を回してみたいし、山下淵にボートを浮かべたら若い人が漕ぐかもしれない。できるための知恵というワンワンによって宝を掘り、他人の厳しい目をモトモセズ、諫早のあちこちを掘り起こし、何とか「花咲か爺さん」の犬にあやかりたいものである。

(館長・鈴木勇次)



季刊

関係者以外立入禁止

Staff Only

その4

「絵画の貸し出し」

昨年11月～12月に唐津市近代図書館で「没後40年 野口彌太郎展」が開催され、本美術・歴史館からも野口彌太郎の作品7点を貸し出しました。野口作品が一堂に会したこの展覧会、ファンの方は唐津まで足を運ばれたのではないのでしょうか？

展覧会は12月11日に終了し、貸出作品が美歴に返却されましたので、今回はその様子をレポートします。



美術品専用車で到着しました。これから積み下ろしです

梱包をほどく作業は美術品専門業者が行います。



双方の学芸員が隅々までチェック。貸し出し前と変わったところはないか念入りに確認します。一番神経を使うところですよ。無事に終わってホッ。お疲れ様でした。



(松本恵美)

むかしの道具 と ひとのちえ

たとえば、「住まいの道具」のおハナシ。

あんどん こたつ たらい

行灯・炬燵・盥

むかしの「住まいの道具」をみてみよう。

PICKUP

行灯(あんどん)



(写真は角行灯)

もともと行燈は携帯用の灯り用具でした。屋内で油皿に菜種油を入れ、そこに灯芯をさし、灯りをとっていたものに風除けとして和紙で囲んだ火袋を取り付け、屋外でも利用できるようなにしたものです。室町時代あたりから使うようになりますが、江戸時代に入るとろうソクが出回り提灯が普及します。それにより行灯はしだいに屋内での使用となっていきました。写真は角行灯で、火袋の一面は開閉できるようにして油の補充や芯の取り換えなどができるようになっています。

PICKUP

炬燵(こたつ)



(写真は置炬燵)

暖房用具で、複数の人数で同時に使うことができ、掘炬燵と置炬燵があります。掘炬燵は部屋の中に炉を切り、中に灰をいれ、炭をおいて火をおこし、その上に檜(やぐら)を設え、布団を掛けて暖をとります。置炬燵は瓦焼の行火(あんか)に炭火を入れ、布団を掛けたのが起こりです。炬燵というと掘炬燵でなくとも置炬燵の上にも炬燵檜をのせたりしますが、こうした檜の使用は江戸時代に入ってからです。

PICKUP

盥(たらい)



(写真はチョンダライ)

湯や水を張り、顔や手を洗う容器です。「手洗い」が転訛(てんか)した呼称とされています。盥というは円形ですが、中世は角形で取っ手を付けたものもあり、曲げ物のたらいもありました。台匏(だいかんな)が出回り、結桶(ゆいおけ)が中世以降からでまわり、近世に広く普及すると、その中の底の浅い桶を盥と呼ぶようになります。結桶で脚が付き、底の浅いものはチュンダライと呼んで大量生産の洗面器が出回る近年まで使っていました。

宇都交差点

宇都交差点は、①長崎方面、②諫早市役所方面、③四面橋方面、④大村方面、⑤諫早野球場方面への五叉路です。宇都交差点は長崎・大村・島原の各方面に向かう際に多く利用されたこともあってか、ここにはかつて「諫早警察署宇都町検問所（写真中央）」がありました。

諫早での国道の建設は昭和7～8年頃(1932～33)から長崎～諫早間で工事が行われ、昭和9年(1934)に現在の国道34・207号とほぼ同じようなルートで国道25号が完成しました。宇都交差点付近では、長崎方面よりは盛土、交差点近くは丘陵地を削って道路が造られました。国道25号は交差点より、現在宇都公園になっている所を通り、線路の西側を平行するように走っていましたが、旧国道34号(現207号)ができること主要幹線の役目を終える事になります。

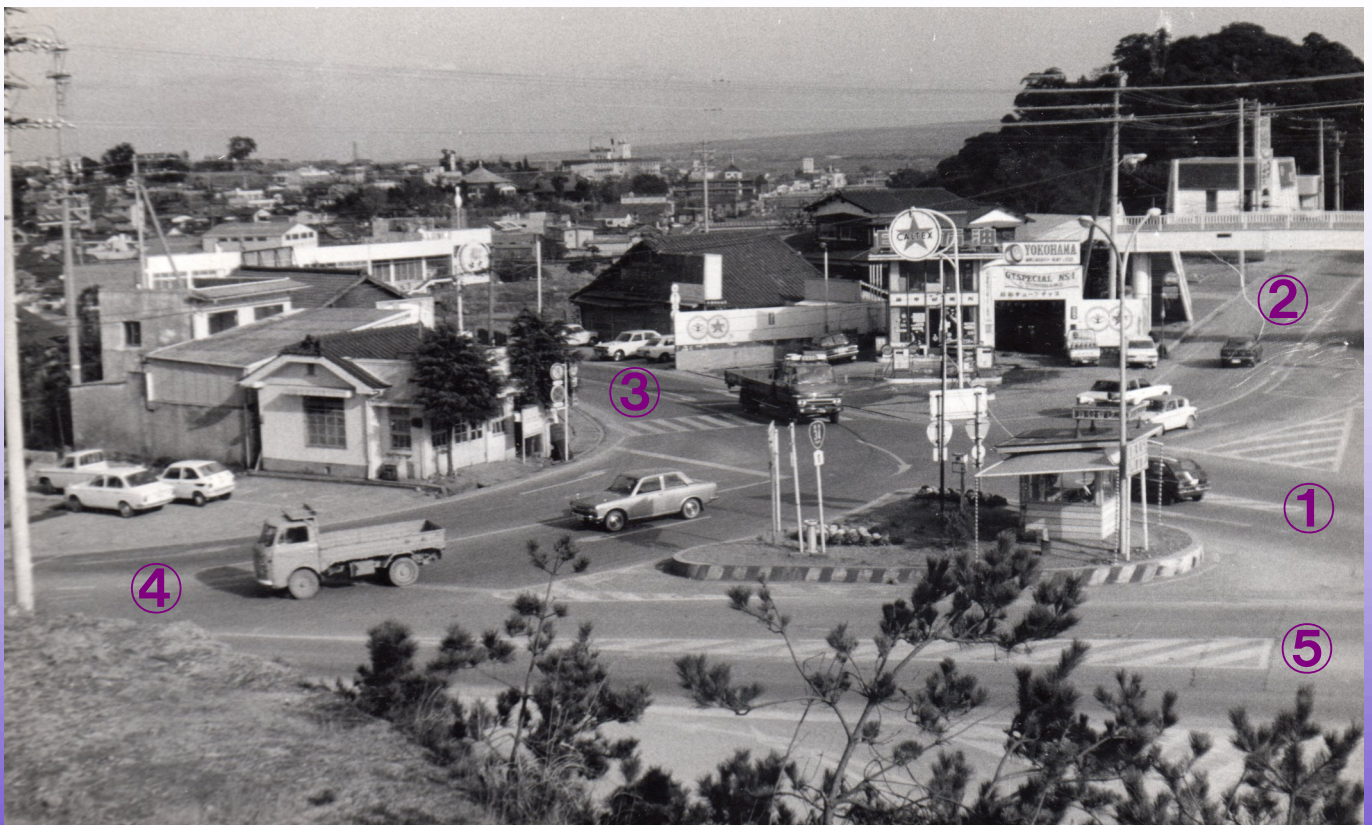
※参考（人が通る道はあったが、車が通れる道ができた年代）

宇都交差点より長崎・大村方面：昭和9年(1934)開通

宇都交差点より四面橋方面：昭和13年頃(1938)開通、廃線年代不明

宇都交差点より本諫早駅方面：昭和25年頃(1950)開通

宇都交差点より諫早野球場方面：昭和29年頃(1954)開通



昭和40年代



双鶴之図

小波魚青

紙本墨画淡彩2曲1双
美術・歴史館所蔵

松鶴図

八十島又橋

紙本着色6曲1隻

1862（文久2）年

美術・歴史館所蔵



諫早ゆかりの日本画家、小波魚青（こなみぎよせい）と八十島又橋（やそしましやきょう）が描いた屏風です。どちらも鶴を題材にしていますが、主に四条派（しじょうは）を学んだ魚青と、南画を学んだ又橋では、描き方が大きく違う対照的な作品です。

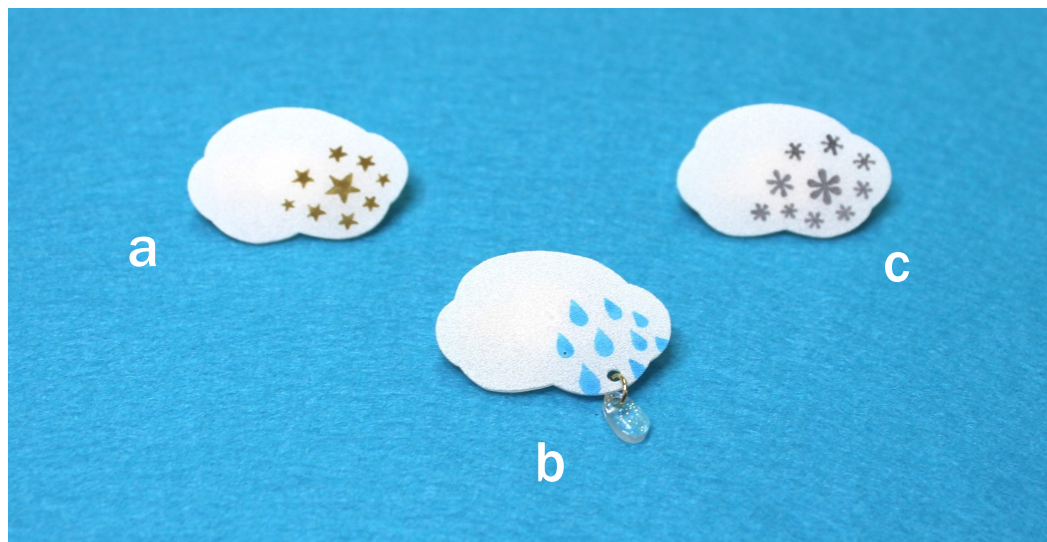
○小波魚青 1844-1918（弘化元-大正7）年

現在の愛媛県宇和島市に生れ、京都四条派の長谷川玉峰（はせがわぎよくほう）らに学びました。1872（明治5）年、現在の長崎市伊良林に本籍を移し、1882（明治15）年に第1回国内絵画共進会に8点出品。1892（明治25）年には日本美術協会展出品作が宮内庁買上げとなりました。墓は天祐寺にあります。

○八十島又橋 1832-1916（天保3-大正5）年

現在の諫早市栄町に生れ、20歳で京都に遊学し、日根野対山（ひねのたいざん）に山水画、前田暢堂（まえだちやうどう）に花鳥画を学びました。長崎に来た清の画家・徐雨亭（じやうてい）にも入門。幕末から大正期にかけての諫早を代表する日本画家です。墓は永昌町にあります。

（百崎恭子）

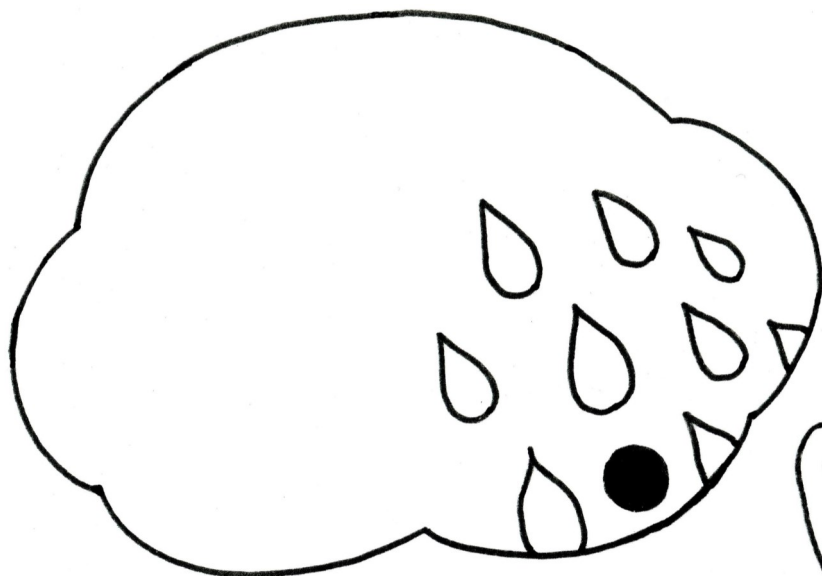


■材料：プラ板（白色、透明 厚さ0.2mm）、ブローチピン（2.5cm）、丸カン（7.5mm）
 ■道具：オーブントースター、クッキングシート、アルミホイル、穴あけパンチ（直径5mm）
 ハサミ、ペンチ、マーカー、マニキュア、接着剤、ノート（重し）、綿手袋

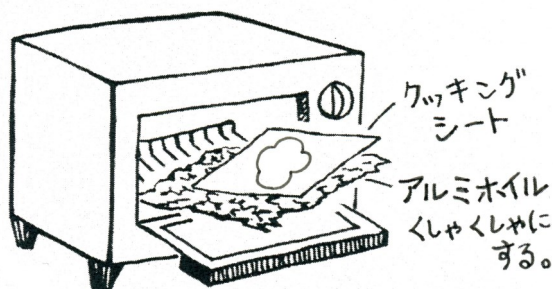
■作り方：

※焼く時には火傷をしないように手袋を！

①プラ板のざらざらの面を表に型紙を写し描きし、ハサミで外枠を切る。（bのみ穴をあける。）



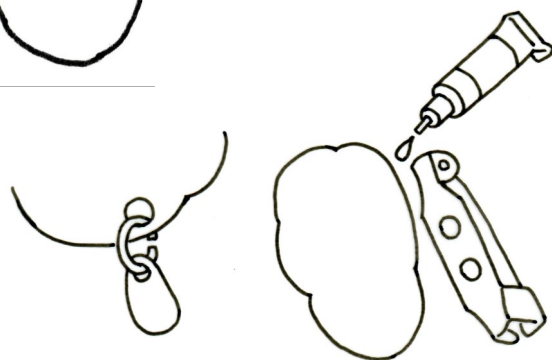
※焼き上がりは約4分の1の大きさになります。



②オーブントースターで縮みきるまで焼く。



③クッキングシートごと取りだし、図のようにはさんで冷ます。



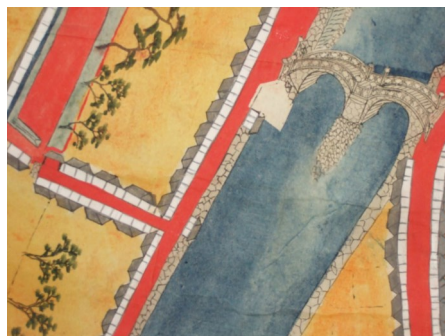
④ブローチピンに接着剤で貼りつけ完成。（bのパーツを丸カンでつなぐ）

お知らせ

発行日：平成29年1月

館企画展

絵図・地図・空中写真展



江戸時代に作成された佐賀藩諫早領内の村々や長崎港警備の様子を描いた絵図、明治・大正・昭和に作成された地図、昭和20年代の空中写真の展示を行い、江戸から昭和にかけ、どのように諫早が移り変わって来たかを時系列に展示します。

期 間／2月25日(土)～3月27日(日)
午前10時～午後7時※最終入場18:30
※毎週火曜は休館
会 場／美術・歴史館[2階企画展示室]
観覧料／無料

館講座・講演会

【講座】館長講座

と き／2月18日(土)午前10時30分～12時
と ころ／美術・歴史館2階研修室
内 容／諫早の七不思議 第9回「諫早と島」
講 師／鈴木 勇次(美術・歴史館長)
その他／受講料無料、事前の申し込み不要

【講演会】石橋の歴史から見る諫早眼鏡橋

と き／2月25日(土)午後1時30分～
と ころ／美術・歴史館1階ホール
内 容／天保10年(1839)に完成した眼鏡橋について、石橋施工技術を中心にして、土木工学の専門家による講演会を開催します。
講 師／岡林 隆敏さん(長崎大学名誉教授)
その他／受講料無料、事前の申し込み不要

第12回長崎県選抜作家美術展移動展

県内トップアーティスト5部門の作品が集います。
期 間／2月8日(水)～2月12日(日)
午前10時～午後7時※最終入場18:30
会 場／美術・歴史館[1階ホール、2階企画展示室]
観覧料／無料

編集後記

ある雨上がりの夕方、
5時なのに虹が現れました。(表紙写真)

夕焼けで赤く染まった空に、美しい七色の虹がゆつくりと現れ、その美しさについつい仕事を忘れ、しばしホッリ見入ってしまった。

俗に「朝虹は雨、夕虹は晴れ」と言われ、こんなふうに夕方に虹を見たときは翌日は晴れるとか。

さて、はてしなく続くときの流れの中で、私たちの生涯はこの天候のようにほんの一瞬のできごとにかすぎません。

でも、その一瞬を充実させ、価値あらしめたい願いを万人が抱いています。

2017年、美術・歴史館は4年目を迎えます。

美術・歴史館には、その時々々の営みに命をかけた先人のすがたが偲ばれる多くの資料があります。

有縁の糸をたぐり、いにしえを知り、今日を充実させ、明日を照らす。

当館の資料も、雨上がりの虹のように皆様のお役にたてれば幸いです。

(山本貢)